

青森県弘前市における観光の現状と課題

—四大まつりを中心に—

小林 孝史

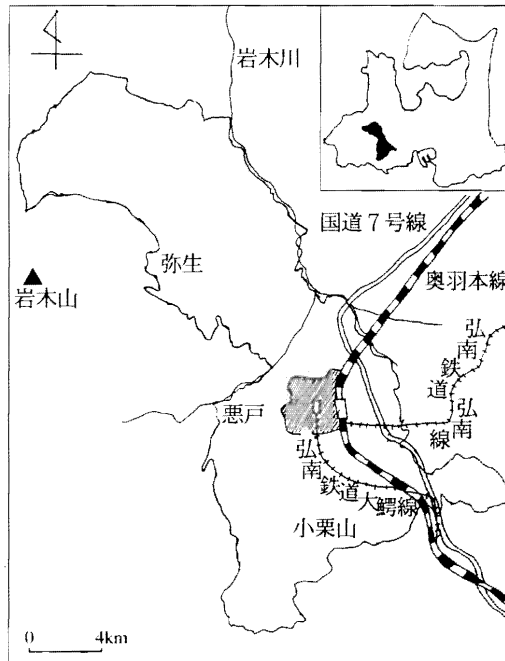
I. はじめに

近年日本における観光動向は、所得水準の向上や余暇時間の増大に伴って広域化する傾向にあり、「見る」観光ばかりではなく、「参加する」・「滞在する」観光へと、観光の多様化が進んでいる。

本稿では、青森県弘前市における観光を、四大まつりを中心に、その他の観光事業についても若干の考察をしながら現状を論じ、それらについて今後どのような課題が取り上げられるか、またその課題に対する対応策について考えていくことを目的としている。

II. 地域概観

弘前市は、岩木山や広大なりんご園などの自然環境を背景に「みちのくの古都」として城下町の面影をとどめ、弘前公園を中心に、歴史的な文化遺産が数多く残されている。さらに東北自動車道の全線開通や青森空港の拡充など、高速交通体系の整備が進み、首都圏との時間距離が短縮している。そのため、東北有数の観光地として年間約400万人以上の観光客が訪れている（図1）。



青森県主要道路地図（1997）より作成

図1 研究対象地域

はじめに、次章では弘前市の観光の現状をより詳細に論じていきたい。

Ⅲ. 弘前市の観光の現状

本章では、弘前市の観光の現状を四大まつり、宿泊施設数、駐車場、宣伝活動の状況に関して述べることにする。

1. 四大まつりについて

弘前のまつりは、通年観光を進めるうえで、重要な観光資源である。特に「四大まつり」は、四季折々のイベントとして市民生活に定着し、観光関連産業や地域経済に大きな波及効果をもたらしている。弘前市の観光のメインである「さくらまつり」は、4月下旬から5月上旬にかけて開催され、全国有数のまつりとして、観光客は年間約200万人に達する。「ねぶたまつり」は伝統的な夏の火まつりとして全国的に知名度が高く、年間150万人近い観光客が集まる。この2つのまつりは、県内外から多くの観光客を迎えている。「弘前城もみじと菊人形まつり」と「弘前城雪燈籠まつり」は、季節感を取り入れたイベントとして定着しているが、今一つ盛り上がりには欠け、観光客も、「弘前城もみじと菊人形まつり」は70万人程度で「弘前城雪燈籠まつり」に至っては、その半分の35万人となっており、遠方からの観光客にはなじみの薄いまつりとなっている（表1）。

表1 四大まつりの行事内容

まつり	期 間	開 催 場 所	内 容
さくらまつり	4月23日 ～5月5日	弘前公園内	ソメイヨシノを中心に5千本の桜が園内を埋めつくし、毎年約200万人が訪れる。
ねぶたまつり	8月1日 ～8月7日	市内中心地	扇ねぶたや組ねぶた大小あわせて約60台が参加し、掛け声とともに市内を歩く。
もみじと菊人形まつり	10月上旬 ～11月上旬	弘前公園内	約1千本のもみじの紅葉が映え、豪華な菊人形を中心に香り高い多数の菊花が咲き誇る。
雪燈籠まつり	2月上旬	弘前公園内	園内は約200基の雪燈籠と約300基のミニカマクラ群を望むことができ、「みちのく五大雪まつり」の一つとして注目されている。

弘前市ガイドブックより作成

2. 宿泊施設数状況

現在、弘前市の宿泊施設は、ホテル12軒、旅館119軒、簡易宿所9軒があり、約4,000人の宿泊が可能であるが、旅館は概して小規模経営であり、大型の団体客を受け入れる体制が整っていない。したがって、市外に宿泊先を求めるなど、通過型の観光客が多い（表2）。

表2 宿泊施設数

年 度	ホ テ ル		旅 館		簡 易 宿 所		総 数	
	施 設 数	客 室 数	施 設 数	客 室 数	施 設 数	客 室 数	施 設 数	客 室 数
4	15	1,016	129	1,356	8	50	152	2,422
5	15	1,016	129	1,412	8	50	152	2,478
6	12	914	128	1,398	8	50	148	2,362
7	12	941	118	1,248	8	50	138	2,239
8	12	941	119	1,264	9	54	140	2,259

弘前市役所企画課統計係（1997）：弘前市市政要覧より引用

3. 駐車場の状況

市内の駐車場は、通常時の観光客への需要を満たしてはいるものの、桜まつり期間は臨時の駐車場を設置して対応している。しかし、弘前公園周辺への駐車場を希望する観光客が多く、公園周辺の循環者が多いため、これが市街地の交通渋滞を引き起こしているという状況である。

4. 宣伝活動状況

弘前市は、恵まれた観光資源や四大まつりを全国的に紹介するため、各種の宣伝活動を実施している。その主なものは、県の東京サービスセンター、旅行会社やJR主要駅の四大まつりポスターの掲示などを通じて行われる観光PRと情報収集などである。また、北海道においても、修学旅行の誘致を主目的とする観光キャラバンを組織し、キャンペーン事業を展開している。

このように、現在でも観光客の誘致を目的に様々な観光活動が行われている。にもかかわらず、通過型の観光客が多いという事実はぬぐえない。現に市で行った調査の結果、次のことがわかった。

平成8年度の観光レクリエーション客入込調査では、入込客数は総数492万6千人で、内訳は県内が335万人、県外客は157万6千人である。さらに、日帰りの観光客は460万6千人で、宿泊客は32万人しかいない。この現状を打開するため、つまり通過型の観光客から滞在型の観光客の増加を促すための具体的な課題を次章で論じていこうと思う（表3）。

表3 平成8年度における弘前市の観光客入込数の内訳

(単位：千人)

総 計	県 内	県 外	日 帰 り	宿 泊
4,926	3,350	1,576	4,606	320

市役所観光課での聞き取り調査により作成

IV. 今後の課題

弘前市が、観光都市として一層の飛躍をとげるためには、基本的な姿勢として、「観光客を暖かく迎える」という市民相互のコンセンサスが必要である。

そこで観光客のニーズとして第1に考えられることは、宿泊施設の質・量の不足である。現在、修学旅行生は北海道を中心に年間約6万人が弘前市を訪れており観光関連業界に大きな波及効果が期待できる。したがって、大型団体客の観光を通過型から滞在型へ誘導するためには、宿泊施設を整備することが重要な課題となる。

第2に考えられることは、環境面においてである。弘前市内の道路事情をみると、城下町特有の道幅の狭い道路が多いうえに、一方通行による交通規制がしかれているため、観光客を目的地に誘導しにくい面を抱えている。また、案内標識等の不足といったところから、観光標識や観光案内板を設置したり、主要な観光施設においては駐車場を充実する必要がある。

これまで、まつりの運営は多分に行政主導型で進められてきた。今後まつりの活性化を図るためには企画・運営の柔軟性が必要であり、民間主導型で進めていくことが求められている。そのため、四大まつりを市民総参加のまつりとして推進し、観光宣伝の強化に努め、効果的なものに変えていく必要がある。また、情報の迅速化に対応するために随時情報の交換が可能な情報システムの確立をはかり、観光客に利便性や満足感を提供することが重要な課題となっている。もう1つ、弘前市が観光の拠点都市として、長期滞在型の観光客の誘致を促進するための手段として考えられることは、質・量共に高水準なリゾート施設を、岩木山麓及び市街地周辺に整備することである。そのために現在考えられている対策は、第1に、岩木山麓の自然保護と景観保全に十分注意して、弥生地区に、大型スキー場をはじめとするスポーツ・レクリエーション施設や大型宿泊施設など質の高いリゾート施設を整備することである。この計画は、昭和40年代からの市のテーマであり、農業以外の産業を発達させようという試みであった。そして昭和63年に制定されたリゾート法をきっかけとして民間もそれを望み、収益性のあるスキー場の建設計画が出された。しかし、弥生地区は保安林であるためその解除が必要だが、現段階ではまだ実行されていない。第2に、小栗山地区に、温泉を利用した宿泊保養施設の建設を進めることである。これは平成2年3月に温泉が出たということで、旅館団地組合が大型団体客を対象とした大型宿泊施設を作ろうということで合意したが民間ということで資金力が不足しており現段階ではめどがたっていない。第3には、悪戸地区にショッピング機能を備えた大規模なレジャー施設や都市型リゾートホテルの整備を進めることである。この計画は、某りんご農家からの申し出により始まり、市がそれに応じて他の農家に団体交渉を行ったが、現段階ではまだ交渉が終わっていない（表4）。

表4 津軽岩木リゾート構想案

地区名	内容
弥生地区	スポーツ・レクリエーション施設、大型宿泊施設、文化活動施設 レジャー施設
小栗山地区	宿泊保養施設（温泉など）、スポーツ施設
悪戸地区	ショッピング機能を備えたレジャー施設、都市型リゾートホテル

弘前市（1993）：第4次弘前市総合開発計画より作成

V. おわりに

本稿では青森県弘前市の観光について現状を論じ、それについての今後の課題や対策を述べてきた。その結果は以下のようにまとめられる。

弘前市の観光は、「さくらまつり」をメインとして約400万人の観光客が訪れる。その他「ねぶたまつり」、「もみじと菊人形まつり」、「雪燈籠まつり」と年間を通じて様々なイベントがある。しかしそれに対して宿泊施設数が不足しているため、通過型の観光客が多い。また、駐車場が不足しているため、「さくらまつり」期間中は臨時の駐車場を設置して対応している。

宣伝活動においては、県の旅行会社等に対する観光パンフレットの配布・提供などを通じてPR活動を行っている。

これらに対する課題の骨子は以下の4つである。第1に、宿泊設備の充実である。第2に、駐車場の拡充である。第3に、宣伝活動の強化である。第4に、高水準なリゾート施設の整備である。

これまで述べてきたように、弘前市の観光都市としての発展には様々な課題が残されている。これらの課題を1つ1つ克服し、市民の観光に対する意識を高め、観光客に対するサービスを向上させる必要がある。それが、弘前市が魅力ある観光都市として発展することにつながると考える。

この研究を進めるに当たってご指導いただいた、後藤雄二助教授に対し、深く感謝いたします。また、貴重な文献資料は弘前市役所観光課、観光協会、商工会議所にお骨折り頂き、提供していただきました。ここに改めて感謝を申し上げます。

【参考文献】

- 松村公明（1991）：盛岡市中心市街地における宿泊施設の分布パターン
地域調査報告（筑波大学）13，175～176
- 弘前市（1993）：第4次弘前市総合開発計画
- 津軽広域観光圏協議会（1997）：津軽路